

学位審査報告書

新制

人

116

(ふりがな) 氏名	うえの かつゆき 上野 勝之
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 475 号
学位授与の日付	平成21年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
(学位論文題目)	
平安貴族社会の宗教的心性とその変容 —夢観念と疾病認識—	
論文調査委員	主査 教授 西山 良平 副査 教授 元木 泰雄 副査 准教授 島崎 健

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、平安時代を中心として、貴族の日常における宗教的心性・信仰意識の具体的なあり方を、夢観念ならびに霊による病とされた邪気・瘡病認識の考察を通して明らかにするものである。宗教者の教理・言説ではなく、一般の貴族の視点から、信仰の重層性の実態や仏教的靈魂観の受容・定着過程、さらにその後世への影響について論じている。「はじめに」では、日本史を始めとする諸分野の膨大な成果を点検し、とくに古記録による研究の不充分性を指摘した上で、研究課題を貴族の日常的な宗教的心性に設定する。

第1章では、日常的な宗教的現象と見做されている夢について、貴族が夢を意味づける基準を解明する。まず神仏・死者の夢に関しては、記紀・風土記では特別であった神の夢が平安期には日常的に発生している。また死者の夢については、平安中期に墮地獄の死者が救いを求める夢が登場し、後期には往生を告げる夢が普及する。次に登場人物が不明確な夢に関しては、真実を含む夢と無意味な夢が混在し、真の意味を読み取るために貴族同士や夢解きが解読を行い、日月＝天皇とするなど特定のシンボル関係による解釈法が成立していた。つづいて、平安期に多発する悪夢については、対応策として外出を控える物忌・慎みや仏事が行なわれる点から、凶事の予兆という中国的な悪夢観が貴族社会に受容されたことを論証し、平安時代の宗教的重層性が夢に対する多様な意味づけをもたらしたことを明らかにした。

第2章では、平安時代に盛行した宗教的疾患である邪気性格を摂関期と院政・鎌倉初期に分けて論じ、ついで邪気調伏のためにヨリマシに霊を憑けるヨリマシ加持の成立について検討する。摂関期の邪気は病者の人格的変調を主な指標として周囲が認識するが、その盛行の一要因は当時の繊細な対人関係に求められる。また、怨霊とは別に現われる多くの無名の霊や祈祷に関わる僧・ヨリマシ関係者の霊は往生できない霊と考えられ、その背景に浄土思想の影響を想定できる。院政・鎌倉初期には、邪気症状が軽症化し、ヨリマシに半職業的な者や巫女が参入する。また、霊に関しては僧の霊である天狗が増加し、生霊の存在が公然化するなど、様々な変化が見られる。ヨリマシ加持の成立過程については仏教書や中国史料の考証から、密教の阿尾捨法をもとに園城寺派の密教僧により定型化され、冷泉天皇の邪気治病を契機に成立したことを解明する。そして、邪気と医学の関係について、医学内部に鬼霊による疾病概念が存在したことなどから、医学的疾病概念と仏教的な邪気概念が重層的に存在していたことを指摘する。

第3章では、権力者藤原道長の邪気概念の具体的内容と変遷について考察する。道長の生涯を4期に区分した上で、まず権力形成途上の道長はヨリマシ加持を活用せず、邪気罹患時には自ら霊へと人格変換を起こすなど邪気を畏れる意識が強かった。しかし、権力確立期には人格変換には至らず、また自らや子

女の邪気に対してヨリマシ加持を積極的に活用するなど調伏する姿勢に転じる。絶頂期には外孫の天皇や子の邪気を自ら祈祷するほか、当時の常識を超えて自身の邪気を自ら調伏するという強い対応を行なっている。しかし晩年には、疫病には加持を行わないという禁忌を破り、自ら娘の邪気への加持を強行するものの、娘は死亡する。この挫折を契機に強行姿勢が影を潜め、自身の邪気病時にも人格変調を起こすなど、ひたすら仏に祈願する依存的姿勢となる。道長の邪気概念が政治的立場と連動しつつ変容することを明らかにし、政治権力と疾病認識・宗教的意識の相関という新しい視点を提示した。

第4章では、邪気と同じく霊による病とされた瘧病（マラリアなど）を取り上げ、宗教と医学の関係の変遷を検証する。瘧は瘧鬼が起こす病であるが、摂関期には二日に一回の発作を特徴とし、加持を中心にまじないや修法が用いられた。しかし、瘧鬼は無人格の霊であるため、その加持には霊を憑けるヨリマシを使わない。院政期には多種の修法や陰陽道祭祀を併用し、また医師が補助的に治療に加わる。鎌倉後期には医師が瘧病の診断を担うようになり、医師の治療により平癒したこともある。室町期には加持が減少し、医師の治療が普通になるが、お札の飲用など依然まじないを多用する。瘧病を通して、疾病認識と治病法の変遷を明確にし、加持の役割が衰退することを指摘した。

「おわりに」では第1章から第4章をうけて、室町貴族の夢と邪気を考察した。夢については神仏や死者の夢が見られるが、悪夢が減少する点に貴族の信仰意識の変化が認められる。邪気については、室町将軍家において少数の政治的怨霊による邪気があるものの、多くの邪気は「狐付き」といったマイナスの疾病概念で語られる。また、陰陽師や巫女の儀礼が用いられ、高僧の加持が減少するなど、この時代には邪気概念の社会的位置付けが低下する。これらは江戸時代の医師や知識階層による憑き物の迷信視につながるものと考えられる。

以上の考察から、本論文は、平安期に形成された神仏や死者の夢の性質、邪気概念の内容や瘧病の治病法が変容しつつ院政期から鎌倉・室町期に継続しており、平安貴族社会の宗教形態はその後の日本宗教史の一つの原形となることを示した。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、平安貴族の夢観念および宗教的・疾病認識を題材に、日本宗教史に取り組み、平安貴族社会の信仰意識が後世に与えた影響を解明することを意図している。神道や仏教など諸宗教の重層性のあり方、とりわけ仏教と日本の民俗信仰との関係、仏教の受容と変容の問題は、日本社会の宗教性の根幹に関わる極めて重要な論点である。それだけに先行研究は日本史・民俗学・宗教学や日本文学にまたがり、重大であるがゆえに困難さをともなっている。本論文は、この課題に正面から真摯に取り組んでいる。

本論文の第一の意義は、日本宗教史を貴族社会の日常性から考察したことである。通例、日本宗教史では宗教者の教理・言説の内容や、宗教と権力との関係が分析される。それに対し、本論文では古記録を中心に、貴族社会の夢観念および宗教的・疾病認識が論じられる。そのために諸研究を学際的に総合し、古記録を博搜する。この方法は従来にない独自のものであり、しかも斬新な結論を導き出すことに成功した。夢観念に関しては、宗教学や心理学・日本文学の分野で、説話集や物語・和歌を素材に検討されてきた。それらは夢の神秘的性格を強調する傾向にあったが、本論文は古記録を分析し、貴族は冷静な夢観念をも有していたことを明らかにする。また、貴族たちが夢に対して行なった仏教や陰陽道関連の儀礼を探り、貴族たちの夢に対する宗教的な認識を浮き彫りにしている。

第二の意義は、従来は摂関期の議論に終始した邪気について、院政・鎌倉初期までを通して検証し、さらに近世社会までを広く展望したことである。この点は、夢観念や瘡病治療に関しても言えることである。院政期以後の邪気概念の実態を解明したことにより、摂関期の時代的な特色を際立たせることもできた。また、邪気概念の地位が低下し、憑き物の迷信視につながるなどの指摘は、邪気の宗教史的な位置づけを可能にするものである。夢観念や宗教的・疾病認識は長期にわたる変動を考察することが必要であるが、そのためには摂関期から室町期まで、幅広く史料を収集しなければならない。本論文は地道な努力の積み重ねと卓抜な分析力から、その作業を成し遂げている。

第三の意義はヨリマシ加持の成立過程を解明したことで、本論文の中でも白眉と言える成果である。従来は漠然と日本古来の神託と密教の阿尾捨法の影響によって成立したとされてきたが、史料を綿密に検証して明確な仮説を提示したことは画期的な成果である。ヨリマシ加持は邪気調伏のみならず託宣を行う民俗儀礼の源流としても注目され、その儀礼構造や歴史的変遷については日本史・歴史民俗学・宗教学・日本文学などの諸分野で論じられてきた。しかし、その成立については、『日本霊異記』などの説話・伝承だけを用いて推論されてきたにすぎない。本論文では、中国の説話・仏教史料や平安・鎌倉期の仏教書など従来取り上げられなかった史料を検討・分析し、古記録の精緻な解釈と合

氏 名	上 野 勝 之
-----	---------

わせて、ヨリマシ加持の成立を冷泉天皇の時代に見出している。この論証は従来の研究水準を遥かに超えており、日本史や宗教史のみならず、民俗儀礼や修験道研究において今後必ず参照される業績であると考えられる。

第四の意義は、疾病認識と政治権力の関係という独創的な視点である。日本史分野では、宗教と政治の研究は寺院統制や宗教政策が主であり、宗教儀礼は政治的な手段とする見方も根強い。本論文では、権力者の精神内部における政治性と宗教的・疾病認識の関連という全く新しい議論を展開している。道長本人の邪気症状の軽重や調伏儀礼の差異、道長自身が邪気を調伏する事例の有無などが時期的に明確に区別され、かつ道長の政治的立場の強弱と連動する事実が明らかになった。白河天皇や後白河天皇にも類似の側面が見られ、今後の研究の深化が期待される。

第五の意義は、瘡病や邪気を通して、宗教と医学の関係を検討し、歴史的な役割交替を詳らかにしたことである。従来、この関係性は宗教史や医学史では重視されてこなかった。瘡病に関しては、摂関期から戦国期までの変遷を考察し、医学的治病の伸張、密教の役割低下を論証した。邪気についても、摂関期から江戸時代までの見通しを示し、治病を担う宗教者の時代的な変化や邪気の社会的評価の低下を指摘した。

本論文は、各章ごとが個性豊かな考証であるが、全体として歴史学的方法論に留まらず、日本文学・民俗学・宗教学・仏教史や医学史・医療人類学などの成果を吸収した上で、関係史料を幅広く活用し、日本宗教史上の意義深い結論を導き出している。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成21年8月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。